

題目

「自己志向・他者志向エゴグラム－MIE (Mie university I and you oriented Egograms) の試作－」

著者

西川和夫＊ ＊三重大学

掲載誌

交流分析研究 (日本交流分析学会) 1994 年第 18 巻第 2 号 pp. 117 ～ 127

分類

統計的尺度特性研究

問題および目的

西川は、交流分析の自我状態理論を拡張して、機能的自我状態が活動する時に供給される心理エネルギーの方向に、内界・自己志向方向 (以下自己志向と表記) と外界・他者志向方向 (以下他者志向と表記) を識別するモデルを提唱した。CP から AC まで五つの機能的自我状態に、それぞれ自己志向的機能状態と外界・他者志向的機能状態を仮定し、予備調査を経て自己志向機能的自我状態 5 下位尺度 (ICP、INP、IA、IFC、IAC)、他者志向機能的自我状態 5 下位尺度 (UCP、UNP、UA、UFC、UAC) を持つ質問紙エゴグラム MIE (新称 IUE) を試作した。予備調査において五つの機能的自我状態次元と二つの心理エネルギー志向性次元に対応する比較的独立な因子構造が得られていた。本研究は試作した尺度について、2 次元心理エネルギー志向性モデルとの適合性を確認する。

方法

調査対象者：大学生および社会人 350 名 (男 148 名、女 202 名)。

質問項目の作成：因子的単純構造を満たすことを目標に、予備調査で用いた質問項目と新たに作成した項目を合わせてエゴグラム質問紙を作成した。最終結果の下位尺度は 8 項目になるよう構成した。

機能的自我状態次元の因子分析：自己志向エゴグラムと他者志向エゴグラムそれぞれについて因子分析を行い、あいまい項目を削除・再配置して直交因子構造に近づけるため、再度因子抽出を行った。

心理エネルギー志向性次元の因子分析：五つの機能的自我状態尺度ごとに自己志向項目と他者志向項目を合わせて独立に因子抽出を行い、単純 2 因子構造に近づくよう項目を削除・再配置して再度直交因子抽出を行った。

自我状態尺度の妥当性：既存のエゴグラム TEG との下位尺度間相関を求めた。

心理エネルギー志向性次元と内向・外向次元の関係：MPI の向性尺度得点と自己志向機能的自我状態下位尺度および他者志向機能的自我状態下位尺度の相関を求めた。

結果および考察

自己志向エゴグラムの因子構造：自己志向機能的自我状態におおむね対応する 5 因子が得られたが、IA と IFC に属する各 2 項目において、他の尺度と重複するやや高い因

子負荷量がみられた。さらに、IA と IFC に属する各 1 項目は ±.300 を超える負荷量を示さなかった。ICP は「自分のしたことの責任は自分で取る」、「自分の理想を実現しようと努力する」など 8 項目を含む。因子 1 にのみ高い負荷量がみられ、平均負荷量 .601、寄与率 9.36% である。INP は「自分の欠点より良いところを意識する」、「生きていることは、つらいことより楽しいことが多いと思う」など 8 項目である。因子 3 に高い負荷量があり、平均負荷量 .535、寄与率 7.11% である。IA は「自分の体の調子をよく知っている」、「計画をたてる時は、失敗しないように注意深く考える」などの項目で構成される。因子 4 にまとまった高い負荷量を有するが、そのうち 2 項目は ICP の代表因子である因子 1 にも .400 以上の負荷量を持つ。平均負荷量 .451、寄与率 4.83% である。IFC は「とりとめもないことを想像して楽しむ」、「雲や星、景色を眺めながらぼんやり過ごすことが好きである」などの項目を含む。因子 5 にまとまった負の負荷量を示すが、因子 2 にも .390 を超える項目が 2 項目ある。平均負荷量 -.424、寄与率 4.20% である。IAC は「何をするにも自信がない」、「人といっしょに居ても孤独な気持になる」などの項目である。いずれも因子 2 に高い負荷量を有する。平均負荷量 .562、寄与率 8.65% である。

他者志向エゴグラムの因子構造：おおむね仮定した他者志向機能的自我状態に対応する 5 因子構造が得られたが、40 項目のうち 5 項目は他の三つの下位尺度因子にもやや高い重複負荷量が認められる。また、UCP と UFC に属する各 1 項目は代表因子の目安とした ±.300 を超える負荷量が得られなかった。UCP は「他人の欠点をすぐ意識する」、「子供・生徒・後輩・部下などが間違っただけをみると、厳しくとがめる」などの項目内容を含む。因子 5 に高く負荷し、平均負荷量 .447、寄与率 4.74% である。UNP は「人が喜ぶと自分のことのように嬉しい」、「他人の悲しみや苦しみをよく聞いてあげる」などの 8 項目で構成される。因子 1 に高い負の負荷量を持つ。この因子には UA、UFC、UAC に属する項目の一部もやや高い負荷量が見られ、UNP 尺度の機能的複合性がうかがえる。平均負荷量 -.532、寄与率 8.48% である。UA は「他人のことは印象だけで判断しないように心がけている」、「自分は感情が安定している」などの項目を含む。因子 3 にまとまった負荷量を持つが、8 項目のうち 2 項目は UNP 因子にもやや高い負荷量が見られる。平均負荷量 -.472、寄与率 6.16% である。UFC は「ひとだかりがしっているとつい覗き込む」、「興味を持ったことはすぐ実行したい」などの 8 項目である。因子 4 に高い負荷量が示されているが、1 項目は因子 1 にもやや高い値が見られ 1 項目は目安値に達していない。平均負荷量 .507、寄与率 5.57% である。UAC は「人に頼まれるとなかなか断れない」、「相手の顔色をうかがったり、気持ちを害さないように気を使う」などの 8 項目で構成される。因子 2 に高い負荷量を有するが、そのうちの 2 項目は因子 2 よりも因子 1 に高い負荷がある。平均負荷量 .533、寄与率 6.25% である。

心理エネルギー志向性次元の因子構造：2 因子構造の仮定の下で、五つの機能的自我状態尺度が、それぞれ単純因子構造を示すかを確かめた。CP 機能の ICP の項目は因子 1 (平

均負荷量 .610、寄与率 20.96%) に、UCP は因子 2 (平均負荷量 -.460、寄与率 9.46) にそれぞれ高く負荷しているが、UCP の 2 項目は因子 1 にもやや高い負荷量があり、ICP との重複がみられる。NP 機能の INP は因子 1 に、UNP は因子 2 にまとまった負荷量を有している。平均負荷量、寄与率はそれぞれ .570、17.43%、-.551、16.28% である。A 機能の IA は因子 1 に (平均負荷量 .472、寄与率 14.24%)、UA は因子 2 に (平均負荷量 .446、寄与率 12.82%) 高い負荷量がみられるが、両下位尺度とも 2 項目が自己志向性因子にも他者志向性因子にも高く負荷している。FC 機能の IFC は因子 2 に (平均負荷量 .476、寄与率 11.28%)、UFC は因子 1 に (平均負荷量 .532、寄与率 12.90%) にそれぞれまとまった負荷量が認められるが、IFC の 1 項目、UFC の 2 項目は目安となる .300 を超える負荷量を示さなかった。AC 機能の IAC は因子 1 に UAC は因子 2 にまとまった高い負荷量を有している。因子間の重複は見られない。平均負荷量と寄与率はそれぞれ .576、17.87%、-.535、15.23% である。

試作 MIE と TEG の関連：既存の代表的なエゴグラムである TEG と今回実施した試作 MIE の各下位尺度間の対応関係は、全体として各他者志向機能尺度が、それぞれ TEG の同じ機能の尺度と高く相関する。ただし、TEG の AC 尺度は MIE の IAC 尺度との間に UAC より高い相関関係を示す。IA と UA は TEG の A 尺度と同程度の相関係数を有している。対応が認められる相関係数の範囲は .768 から .432 である。

自己志向・他者志向機能的自我状態と内向・外向次元の関連性：MPI の向性尺度との相関結果は、自己志向下位尺度の INP が外向性と相関し IAC は内向性と関連することが示された。他者志向下位尺度では、UNP と UFC が外向性と関連することが明らかになった。関連が認められる相関係数は UFC の .615 を除き、±.444 から .381 の範囲である。

考察：機能的自我状態尺度の因子的独立性に関して、自己志向性エゴグラムと他者志向エゴグラムとも、仮定した五つの機能的自我状態に対応する単純因子構造が得られた。ただし、自己志向エゴグラムでは IA と IFC の項目に他因子への重複負荷がみられ、他者志向エゴグラムでは UA、UFC、UAC の項目に他因子と重複する負荷量がみられた。下位尺度の因子的独立性がまだ十分でないことを示している。各機能的自我状態尺度の心理エネルギー志向性次元について、CP 機能と A 機能に自己志向因子と他者志向因子に重複する負荷量を示す項目があり、志向性次元の分離を改善する余地を残している。TEG との相関は予測された通り、MIE の他者志向エゴグラムの下位尺度と対応することが確かめられた。また、TEG の AC は MIE の IAC で測っている自我機能を反映しているという予測が確かめられた。INP の優勢な機能である自己肯定的意識は、外界からの引きこもりや悲観的といった内向的傾向と異なり、安定した自己感覚に基づく外界・他者に対する積極性に結びつく可能性を示唆する。防衛的な意識・態度が優勢な IAC は、内向性の特徴と共通性が高い。他者に対する温かな配慮を特徴とする UNP や、UFC の外界・他者に対する自由な衝動の解放機能は、MPI の外向性と正の関連を示している。

(要約者：西川和夫)